



Title	2022年度 意匠学会論文賞選考結果報告
Author(s)	今井, 美樹
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92365
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2022 年度 意匠学会論文賞 選考結果報告

学会賞選考委員会
副委員長 今井美樹

受賞論文

千代章一郎

「「装備」の制作におけるシャルロット・ペリアンとル・コルビュジエの共同性」

授賞理由

千代章一郎会員の受賞論文「「装備」の制作におけるシャルロット・ペリアンとル・コルビュジエの共同性」は、ル・コルビュジエが『今日の装飾芸術』(1925)において「新しい装飾」として定義した「装備 équipement」について、1927-1937 年の 10 年間にアトリエ所員であったペリアンと共同して開発した経緯を検証した論考である。

「手足のようなオブジェ=型 objet-type」としての「装備」が、「椅子・卓・棚」および照明や衛生設備として還元され室内に配置される理論とプロセスにおいて、ペリアンが関与した事例を分析し、豊富な図表で示しながら明示した。また彼女がアトリエ退所後も「装備」の概念を用いた活動が続け、ル・コルビュジエとの共同から離れて独自性を獲得していった過程も示唆し、両者のそれぞれの方向性とその相違を明確にしたことが評価された。

千代会員は、本論がル・コルビュジエの師オーギュスト・ペレからペリアンに至る人物関係との相互作用を通して「装飾」の 20 世紀的変容の一連の考察を視野に入れた論考であることに言及している。このことは千代会員が本誌『デザイン理論』55 号を皮切りに、57 号、74 号、76 号、そして本論 80 号の投稿によってル・コルビュジエの建築ならびに近代建築に関わる人物との関係性を論じてきた経緯でもわかる通り、これまでの堅実な研究姿勢にも評価が上がった。

選考経緯

本論文賞は『デザイン理論』80 号、81 号に掲載の学術論文 8 編を対象とし、天貝義教委員、今井美樹委員、川島洋一委員、竹内育子委員、並木誠士委員、畑中英二委員、益岡了委員、の 7 名が選考を行った。事前に各委員が上位 3 論文の選出とその理由を記述し、これらの結果をもとに後日、大森正夫委員長とオブザーバーとして伊原久裕次期委員長を交えディスカッションを行い(川島委員、畑中委員は欠席)、各論文を精査することで上記の

結論を得た。

選考の最終候補には、五十棲亘会員「洋裁文化におけるファッションデザイン批評の展開とその問題——雑誌『装苑』の言説を中心に」が挙げられた。五十棲会員は、1936年創刊の服飾雑誌『装苑』について、戦後の創作合評を中心に、日本のファッションデザイン批評の形成を、誌面の言説より丁寧に読み解いた考察が評価された。また鈴木彩希会員の「戦後における着物の改良と「新しいキモノ」の潮流」——雑誌『美しいキモノ』の分析から」も注目された。鈴木会員は、洋装化の進む戦後日本におけるキモノ和装について、西欧化に伴う身体性や服飾の機能性を与えることによって改良に取り組む様子を提示し、日本の異文化受容やイデオロギーの変化をも指摘する考察が評価を得た。